

1	事業名	試験研究調査費	予算額	10,149 千円
2	事業細目	(試験研究調査項目) 増養殖技術研究(ビワマス増殖研究)	予算額	2,203 千円
3	期間	54年度～ 年度	予算区分	県単
4	担当者	田中		
5	目的	<p>毎年実施されているビワマスの種苗放流について、その増殖効果を明らかにし、更に効果的な種苗放流技術を開発する。</p> <p>(適正放流サイズ、適正放流量、適正採卵量、放流時期等)</p>		
6	方法	<p>(1) 標識魚回収調査：56、57、59の各年度に放流した標識魚を回収し、成長、混獲率等について解析する。</p> <p>(2) 漁獲魚調査：主要漁獲期である6月～9月に主要市場へ行き、漁獲魚の体型及び鱗による年令査定によって漁獲の実態を明らかにする。</p> <p>(3) 採卵親魚調査：採卵特別採捕期(10月～11月)に、採卵場へ行き、親魚の体型や年令組成を調査する。</p> <p>(4) 放流種苗への標識作業：本年度放流される種苗のうち、2g体型のものについて脂鰭切除により標識し放流。</p>		
7	結果の概要	<p>(1) 標識魚回収調査：回収率が低く、現在までに(今年度)15尾程度しか得られていない。</p> <p>(2) 放流種苗への標識作業と放流</p> <p>ア 61年度の漁連のビワマス種苗放流は、表1のとおり実施された。そのうち2g体型の236,930尾について、そのうち50,000尾を標識魚として、脂鰭切除した(標識率21.1%)。即ち、61年度放流群のうち2g体型の放流効果を明らかにすることができる。</p> <p>図1.に明らかな様に漁獲魚の6割は2+、3割は3+で占められるので、本年度放流群は、63～64年に主に漁獲されることになる。又、図2.に明らかな様に採卵親魚の5割が、2+として(63年度)、4割が3+として(64年度)回帰する予定である。</p> <p>イ 61年度、当水試において飼育したビワマス(2.5～3g)750尾を脂鰭および腹鰭を切除した後、当水試総排水路へ放流した。63～64年に当场への回帰を想定しての放流で、回収率を調べる予定である。</p>		

8 主要成果の具体的数値 (図・表 等)

表1. 昭和61年、ビワマス種苗放流実績 (漁速) と水試標識数

	放流体型	放流尾数	標識尾数	放流月日
河川放流	0.4~0.5g	450,000	0	3月24日
湖中放流	0.9g	150,000	0	3月14日
	2.0g	236,930	50,000	5月9日・16日
計		836,930	50,000	

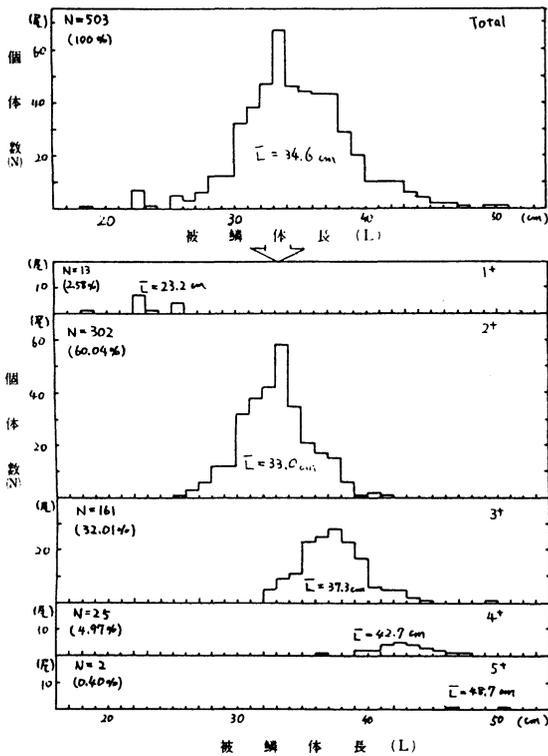


図1. 1984年5月~9月に刺網で漁獲されたビワマスの体長組成及び年齢組成 (無標識)

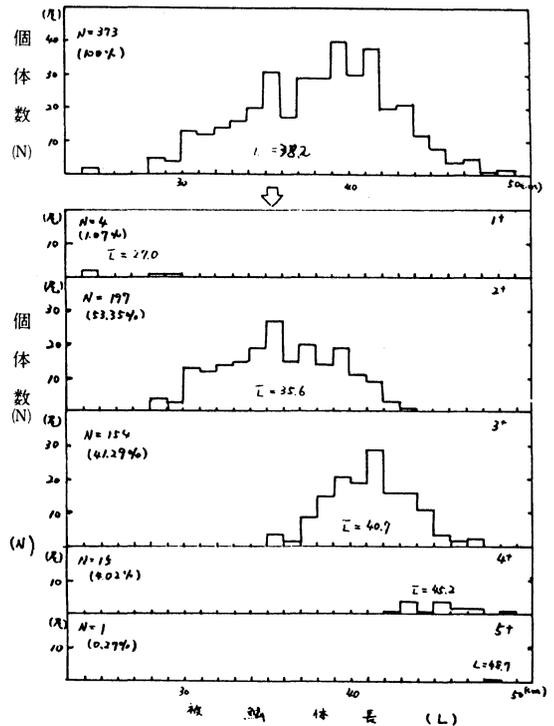


図2. 1984年10月~11月に採捕されたビワマス親魚の体長組成及び年齢組成

9 今後の問題点

- (1) 資源管理型漁業を最終目的として水試としても資源解析を主体とした総合的な調査に取り組む必要がある。又ビワマスは放流効果のモデルとしては最適のものと思われ、放流効果調査の必要な他魚種への応用についても好材料を提供できる。
- (2) 漁連に対しても県として今後のビワマス種苗放流のあり方について明確な提示をしていくようにする。

10 次年度の具体的計画

59年度と61年度に放流した標識魚の回収調査を主体に実施し、あわせて市場における漁獲魚調査、特別採捕時における親魚調査を行い、59年度、60年度の同調査と比較しながら、年度間の差異等について検討する。